
エレメンタル・コード

ノータイスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エレメンタル・コード

【Nコード】

N6776I

【作者名】

ノーティスト

【あらすじ】

人は、欲深い生き物である。

それ故に世界に拒絶される。

人は、社会と密接に係わり、その中で小さな幸福を得ようとする。

それ以上の幸福を得ようとするならば、社会と自身の関係を切り離すしかない。

あなたは、今・・・幸せですか？

1話：存在否定

人は、欲深い生き物である。

それ故に世界に拒絶される。

人は、社会と密接に係わり、その中で小さな幸福を得ようとする。

それ以上の幸福を得ようとするならば、社会と自身の関係を切り離すしかない。

あなたは、今……幸せですか？

一人の少年と少女が学校へ向かう途中だった。

年齢は、どちらも16歳。

同じクラスと同級生だった。

少年、神庭航の半歩後をしなやかな足取りでついていく黒いロングヘアが特徴的な美少女。

少女の名前は、神楽漣と言った。

航は、静かに自分の後ろをついて来る漣に振り向いた。

「どうした？ 今日、えらく静かだな？」

「そんな事は、無いわ。いつも通りよ」

漣は、航の問いかけに表情を崩さずに冷静に答えた。

そんな漣の態度に航は、少し困ったような表情を浮かべる。

「なあ、こんな事を聞くのは、いまさらだと思うが・・・」

「何？」

「漣、おまえは、どうしてクラスにとけ込もうとしない？ もう10月だ。入学してから、どれぐらい経ったと思ってるんだ？ まるで他人を拒絶しているみたいだ」

「あら、心外ね。少なくとも私は、航を拒絶したりなんてしないわ」

「そうじゃない。俺以外の他人を拒絶してるように見えると言ってるんだ」

「あたりまえよ。私は、航以外の他人には、興味がないの」

漣は、しれっと冷静な表情でそう言ったのけた。

航は、複雑な表情を浮かべると困った様子で再び問いかけた。

「それは、なんだ？ 告白なのか？」

「勘違いしないでよ。私は、航を人間としてみてるだけ。それ以上

でも以下でもないわ」

「なんだ。それは？　じゃあ、俺以外の他人は、人間以下だとも言うのか？」

「そうね。例えるなら、猿以下の存在」

漣がキツパリッとそう言うと、航は、呆れた表情でため息をついた。

「お前は、凄い。凄い奴だ。いまさらのように実感したよ」

「そう？　ありがとう」

漣は、ニコリと笑みを浮かべて答える。

「航、私は、あなたを人間として見てるわ。人間として見てるから、私とは、対等なの。あなたは、もっと自分を誇るべきだわ」

「それは、・・・誇るべき事なのか？」

航が呆然と聞き返すと、漣は、右手の人差し指を自分の口に接触させると、そのまま航の頬にプスリと突き刺した。

「痛っ！！　いたた。何するんだ!？」

「少し、急がないと遅刻しそうだわ」

漣は、抗議をあげる航を無視するようにそう言って、横をすり抜け、航の前を歩きだした。

航は、そんな滯を見て呆れながらも、そそくさと、彼女の後を追いかけるのだった。

2話：ナノ・ハザード

霧島周防は、不機嫌だった。

東京にあるオフィス街、某50階建てのビルの一室。

楕円形の机に7人の老人達と、白衣を着た若手の青年・・・霧島を含めて計9人で会議を行っていた。

霧島は、こんな会議など、出たくなかった。

しかし、一企業のトップとして出なくては、ならなかった。

企業を運営する為には、資金が必要だったからだ。

これから、老人達を説得して、運営資金を獲得しなくてはならないのだ。

そう考えるだけで、霧島の心は、ざわついていた。

もう、70歳を超えたような老人達が薄気味悪い視線が霧島の隣で説明を続ける白衣の青年にそそがれていた。

この白衣の青年は、霧島の企業の一従業員であり、研究者の一人であった。

名前を、上野久司と言った。

上野は、液晶のプロジェクターから映し出される映像を指差しなが

ら説明を続けていた。

「この映像は、複数あると思われるマテリアル型ナノマシンの拡大写真です」

「それは、尾崎博士が開発したと言うアレかね？」

「そうです。それも解析できたのは、まだこのナノマシンだけでありまして……」

老人達は、訝しげに上野の説明と映像に目を泳がせていた。

そんな老人達の姿を霧島は、不機嫌そうに観察している。

「こんな老害どもの言いなりとは、情けない」

そんな言葉を霧島は、思わずつぶやきそうになった。

ここに居る老人達は、金と権力を持ち合わせてる社会にとって、とても迷惑な存在だ。

政治、経済、拳句の果てに安全保障に口を出してくるような連中である。

それ故に敵にまわすと怖いのが、見方にすると頼もしい存在でもあった。

「このナノマシンの中央には、フォトニクス結晶構造を持つ物質で構成されています」

上野は、映像に映し出された虫みたいなモノの中心を指差して説明を続けていた。

「まさか、フォトニクス・モーターとでも言うのかな？」

「おそらく、光が動力源のモーター。フォトニクス・モーターなのでしょう」

「信じられんな。尾崎博士は、モーターの開発に成功していたのか」

「このナノマシンの特徴は、他にも解析されています。足の部分に注目してください」

上野がそう言うと、虫の映像の足の部分が拡大されて映し出される。

「ある種の触媒だと、考えられます。実験データから、解っているだけで60種以上の物質の合成と分解が可能です」

「それは、どう言う事なのかね？ そんな事は、不可能なのでは？」

「まだ解明されていませんがこの特殊な触媒を使い、分子の結合、分解。あるいは、原子の結合を行っているように思われます。つまり、このナノマシンにある物質を分解しろと言う指令が来るとその物質を分解しようとしています。触媒では、直接分解できない物質であっても前段階で分解できる物質にするモノを合成、生成してしまうのです。まあ、ある種の無敵の分解酵素の様な役割をします」

「わからんな。尾崎博士は、このナノマシンを作り、何を成そうとしているのだ？」

老人達は、尾崎博士の作った不可解なナノマシンにさまざまな疑問と質問を上野にぶつけてきた。

収集がつかなくなって来たと、判断した霧島は、声を張り上げてこう言った。

「尾崎博士は、生前、こう言っておりまして。「世界を作り変える」と」

霧島のその声と言葉に老人達は、一斉に静まり返った。

「上野君。あれを見せてあげなさい」

「えっ……良いのですが？」

「かまわんよ」

霧島の命令に上野は、少し緊張した様子で手元にあるノートパソコンを操作する。

プロジェクターの映像が切り替わり、今度は、世界地図が映し出された。

そして、その世界地図の上の所々に赤い靄のような印が表示される。

「これは、なんだと言っただね？」

老人の一人が驚いて声を上げる。

「この世界地図にある赤い印は、弊社が調査してた結果……尾崎

博士のナノマシンが広がっている場所になります」

「なっ……」

老人達は、驚いた養子で一斉に声をあげる。

「ごらんの通り、この未知なるナノマシンの汚染は、世界中に広がりを見せています。早急な対策が必要なのです」

「しかし……だね。人間にも自然にも害が無いのだろうか？ 無害であれば放置と言う選択もある」

老人のその言葉に霧島は、またかと奥歯を噛み締める。

「害があつてからでは、遅いのです！！ 上野君、あの映像も見せてあげなさい」

霧島の言葉に上野は、再びノートパソコンを操作する。

切り替わった映像は、地下の姿を映し出していた。

「この映像は、地下500メートルを映したものです。世界中の地下に……このようなコロイドと申しましょうか。ナノマシンの集合体が形成されています」

「いったい。このナノマシンは、コロイドを形成して何をしようと
言うのかね？」

「現状で解っている事は、このコロイドが一種のハードディスク的な役割を担っていると言う事です。世界中の地球の地下にナノマシ

ンによる地球規模の記録装置が稼動していると言つ事です」

「何を記録していると言つのだね？」

「データ量は、常に増えて行っています。その情報量から計算するとおそらくは、時間的に起きてる全ての出来事を記録していると推測します。この意味がお分かりになりますか？」

「・・・」

「データ・ベースは、我々にとっては、とても有用だと言つ事です。それが正確であればあるほどです。このナノマシンが蓄積しているデータを利用できれば、天気予測から、株価の予測まであらゆる予測と推測が可能になります」

「我々の利益につながると言つ事か？」

「むろんです。ですが、このデータベースを扱うには、更なる研究と時間・・・そして資金が必要なのです」

霧島は、老人達に力説する。

老人達は、お互いの顔を見合わせると頷いてみせた。

「良いだろう。資金援助の件は、都合をつけようじゃないか。ただし、期限を付けさせてもらう。その期間に成果が出ないようであれば・・・わつておるな？」

「はい。もちろんです。必ず成果を出してみせましょう」

霧島は、そう言って、老人達にふかぶかと頭を下げた。

「いいんですか？ 本当事を報告しなくて」

老人達が居なくなった会議室で、上野は、霧島に対して少し不満げにそう言った。

「真実を告げた所で、どうにもならんよ。逆に資金援助を打ち切られてた可能性がある」

少し疲れた表情で霧島が答えると上野は、呆れたと言わんばかりの表情を浮かべた。

「データベースを利用するには、CPUの様な存在・・・いわばコアとなるモノが必要です」

「わかっているさ。それを探し出すか。それに代わるコアを我々が作るか、どちらかを選択しなくてはならん」

霧島は、つぶやく様に言うとポケットからタバコを取り出して火をつけた。

「我々に作れるのでしょうか？ 尾崎博士の作ったナノマシンには、まだまだ解明されていない機能があります」

「人間が作ったモノだよ。人間が解明できないわけがない」

霧島は、それが当然だと思っていた。

神が創ったモノが解明できなくても、人間が作ったモノなら、人間が解明できるはずだと。

3話：友人達

歴史を学ぶ事は、重要である。

特に近代史を学ぶと言う事は、世界の状況、この国の立場や状況、今の自分自身の置かれている立場を知る事に繋がるからだ。

そして、歴史を学ぶ事で明確な敵を認識する事ができる。

「え〜っ、今から約20年前・・・南米ブラジルにおいて、大きな災厄が起きました。最初は、事故でありましたが、後に世界中に禍根を残す事件へと発展する事になります」

一人の年老いた教師がゆっくりとした口調で語りだした。

歴史の授業。

神庭航は、退屈そうに老教師の説明を聞いていた。

「現在は、開発研究が禁止されているマテリアル型ナノマシン開発は、当時は合法でありました。悪化の一途をたどっていた自然環境を再生する為に世界中で始められたナノマシン開発でしたが南米ブラジルで起きたナノマシン暴走事故により、マテリアル型ナノマシンの開発研究は、凍結される事が国連で決議されたのです」

航は、ふっと、窓の外を覗き込むと、雨によってびしょ濡れになった校庭が目飛び込んでいた。

天気の状態を確認すると、航は、頭を抱えてうなだれた。

「今日は、サッカーの練習試合の日なのに・・・こりゃ、中止だな」
航がそう呟くと、老教師は、ジロリと航の顔を睨みつけた。

「神庭君。この後の歴史経緯を知っているかね？」

老教師は、航を挑発するように言った。

すると航は、ニコリと笑みを浮かべて説明を始めた。

「そのナノマシン・ハザードと言われる被害は、一向に沈静化する気配を見せず。ナノマシンの汚染は、南米を覆いつく勢いで広がっていきました。国連は、世界中に非常事態宣言を発令し、核ミサイルによる沈静化を議会に提出。しかし、複数の国の拒否権により、実行に移されませんでした。ですが自国の足元までせまった汚染に不安を抱いたアメリカ合衆国は、国連決議を無視。単独で核ミサイルによる浄化を試みました。結果、十数発の核ミサイル攻撃によりナノマシンによる汚染は、沈静化する事になります。そして、南米は、
・・・」

「よろしい。よく、勉強しているようだな」

老教師が少し不満げに言うと航は、そそくさと席に座る。

「えっ」。この事件がきっかけにより、ナノマシンの危険性が世界的に議論され。マテリアル型ナノマシンの研究と開発は、国際的な条約と法律で厳しく捕りしまわれる事になったのです」

老教師の説明が続く。

「残念ながら、我が国においても忘れては、いけない事件があります。尾崎博士が惹き起こしたナノマシン密造事件です。尾崎博士がナノマシンを密造していた事が発覚し、我が国は、核攻撃の危険にさらされた事件で・・・」

航は、老教師の説明にピクリと、その身を震わせた。

尾崎博士が巻き起こした事件は、当時この国を危険さらしたテロリストとして執拗にマスコミに叩かれた。

それ故に誰もが知っている事件で、この国においてもっとも忌み嫌われる出来事である。

航がこの事件のニュースを見た時、自分の目を疑った。

それは、尾崎博士は、航と知り合いであり、何度も顔を合わせた事のある人物だったからだ。

昼休み。

航が教室で弁当を食べていると、一人の女生徒が側にやってきた。

「よう！ わったるう！！ 今日も不機嫌な顔で弁当を食べてるね」

女生徒は、開口一番にそんな事を言って、航の背中を軽く叩いた。

「なんだよ。その挨拶は・・・」

航は、少しげんなりとした表情でそう言った。

同じクラスと同級生。

航にとっては、幼馴染の友達。

名前は、三島典子。

とにかく明るく元気な所が特徴で、クラスや学園での人気者。

顔の作りも美人では、ないが魅力的な顔立ちをしていた。

「なんかね。何時も不機嫌そうな顔で弁当食べてるからさ。その航の顔が脳裏に焼きついてるんだよ」

「あー、うー、それには、事情が・・・ね」

航は、頑張っつて半分ぐらい平らげた弁当箱に視線を落とした。

はつきり言っつて、このお弁当は、美味しくないと言っつて航は、断言できた。ただ、作っつて貰っつてる手前、断る事ができずに毎日眉を潜めて弁当を食べていた。

「そのお弁当、遷ちゃんか？」

「ああ」

「ハッキリ言っつた方がいいよ。航は、遷ちゃんには甘いんだから」

典子のその言葉に航は、何度も頭の中で否定していた。

航は、お弁当が不味いと言う事を最初にわたされた時に言った事がある。

その次もその次もハッキリと航は、漣に言ったのだ。

しかし、漣の調理の腕は、まったく上達しなかった。

はじめは、何かの嫌がらせかと航は、思ったが、そうでは無いと解つてから、断れなくなってしまうたのである。

「ねえ、その肝心の漣ちゃんは、どうしたの？ 姿が見当たらないけど」

典子は、教室を見渡して航に問いかけた。

「保健室。気分が悪いと言ってた」

「えっ、そうなんだ。でも、さすが漣の彼氏！！ よく見てるね」

典子がそう言つと航は、首を左右に振って否定した。

「いやいや、典子さん。漣とは、そう言う関係じゃないから」

「えーっ、毎日弁当作ってくれるのに？」

「うっ……」

「毎日、家までおこしに来てくれて、朝食まで作ってくれるのに？」

「いや、そんなんだけどね。そう言う雰囲気じゃないと言っか。何か違う気がするんだよ」

航がばつが悪そうな顔を見ると典子は、呆れた様子でため息をつく。

「うーん、航の顔は、中の下ぐらいだから。選り好みしていると彼女の一人も出来ないよ?」

「俺をフツたあんたがそれを言うかね」

航は、複雑な表情で過去の出来事を思い出していた。

航が中学生の頃、典子に告白した事があった。

しかし、一週間もしない内に

「やっぱり、航と、恋愛なんて無理だ」

と、典子に言われて一方的にフられてしまったのである。

そんな事があっても航と典子の関係は、幼馴染と言う枠組みから外れる事は、なかった。

ただ、典子の明るさと割り切った性格のおかげで、航も関係を崩す事なく付き合っただけだ。

航が箸がすすまない弁当を前にして、典子と雑談していると、一

人の男子生徒が割って入って来た。

「航、まだ弁当食べ終わってないのか？ もう直ぐ昼休みが終わるぞ」

まだ、半分以上残っている弁当箱を指差しながら、その男子生徒は、航に労わるような口調でそう言った。

新田忠司。

それがその男子生徒の名前だった。

航にとっては、同じクラスの同級生。

そして、親友でもあり、現在の典子の彼氏と言う存在。

典子にフられて、間もない時期に典子が「彼氏が出来た」と、航の前に連れて来た事がきっかけで、その時からのつき合いである。

性格は、航が直情的である事に比べ、まったくの正反対。

とにかく、とても冷静で何事にも動じない性格をしていた。

それ故に正論をよく言うので、クラスメイトから煙たがられる事もあった。

「忠司か。いいいいの。放課後までに食べ終わればいいんだよ」

「まったく。お前のそう言う所。直した方が良くないと思うんだが」

忠司が呆れた様子でそう言うと、航は、弁当箱の白米を箸で掴み取り、ゆつくりと自分の口の中へ放り込んだ。

「忠司、つ、ちよつと聞いてよ。航ったらね。澁ちゃんの事、彼女じゃないとか言うんだよ」

「なんだ、航。まだ神楽の事を受け入れられないのか？ あんな美人は、他に居ないと思うがな」

「だからさ。典子にも言ったけど。そう言う関係じゃないんだよね」

航は、少しうんざりした様子で考えこむように右頬に右手を当てた。

「なあ、航。話は、変わるが……。神楽の事なんだが……」

唐突に忠司が真剣な表情をしてそう切り出した。

突然の事に驚いた航だったが、忠司の様子から重要な話なのだと感じとっていた。

「どうしたんだ？ いきなり」

「クラスの男子の連中がさ。神楽の事……。襲うとかそんな物騒な話をしていた」

「それで？」

航の声が少し低くなった。

「当然、握りつぶしておいたよ」

「さすが友だね。感謝するよ」

「詳しい話を聞いたんだが。どうも、それを指示したのは、女子の連中らしい」

その言葉を聞いた典子がハッと表情を曇らせた。

「あのね。航。今更なんだけど。ほら、漣ちゃんのような、協調性の無い子って・・・女子の間では、嫌われやすいのよ」

「もう、入学して10ヶ月以上経ってるのに、なんで今更」

「女子の間では、前からちよつとね。私が説得して、今まで押さえ込んでいたんだけど。そろそろ、限界みたい」

「・・・」

「航、漣ちゃんから、あまり目をはなさないであげて」

「わかったよ」

航は、力つよく頷いてみせた。

いずれ、こう言う事態になる可能性を航は、考えなかった事がないわけではなかった。

協調性の無い漣の性格から、いずれ他人からの反発を招く事は、理解していたのである。

他人を拒絶すると言う事は、他人からも拒絶されると言う事だ。

学園と言う村社会で大切なのは、協調性であり、その協調性を乱す存在は、村社会にとって悪になる事もある。

社会に必要なのは、円滑な人間関係であり、個人の能力では無いのだから。

忠司は、少し考える様子で航の右肩に手を置いた。

「航。お前も気を付ける」

「どうして？」

「神楽が唯一、心を開いてるお前に予先が向く可能性がある」

「そうなるなら、それでいいよ。少なくとも漣に害が及ばないならね」

航がそう言うと忠司は、少し複雑な表情を向けた。

「なあ、航。俺たちは、間違っていたんじゃないか？」

「何を言っているんだ？」

「神楽を助けている気になって。それで、神楽は、さらに他人に距離を置く様になったんじゃないのか？ 周りから、刺激を受けないと解らない事だって・・・」

忠司の言葉に航は、勢い良く席から立ち上がって、忠司の胸ぐらを

掴んだ。

「今更、何言つてんだ!？」

航の激しい形相に忠司を目を逸らす。

「いや、さっきの言葉は、忘れてくれ……」

忠司のその言葉に航は、気が抜けた様に再び席についた。

「解つてくれたのなら、いいさ」

航が弁当のおかずを箸で突いていると、さっきの航と忠司のやりとりを見ていた典子が口を開く。

「でも、忠司の言う事も解るよ。このまま、学校を卒業して、社会に出れば、苦労すると思う」

「それは、そうなった時に考えるさ」

航は、少し悲しそうな表情を浮かべ、静かにそう言った。

4話・影

闇

空間全体に広がる闇。

その闇の中でぼつりと一つの白いテーブルと対面に置かれた白い椅子。

航は、呆然とそのテーブルを眺めていた、

航の意識は、半覚醒状態だったが、次第に霧が晴れるように意識が浮上してきた。

航がフツと目の前の白いテーブルの向こう側に黒い影が存在しているのに気が付いた。

白いテーブルの向こう側。

白い椅子に腰掛けた黒い影。

人の形をしているが、航の目に映るのは、黒い闇そのものだった。

そして、黒い顔らしき部分に大きな口が開かれた。

「やあ、久しぶりだね。何時ぶりだろうか？　ここ来て、話をしないかい？」

黒い影がいきなりそう言って、航を手招きをする。

航は、落ち着いた様子で黒い影の指示に従い、対面の白い椅子に腰掛けた。

「さて、今回は、何を話そうか」

影は、航をからかう様にそう言って、両腕を組む。

「これは、夢だ」

航は、唐突にそう影に言った。

「そう、これは、ただの夢。現実には、存在しない夢のようなモノ。それでも君がここ居るのは、意味がある事だと思っよ」

「・・・」

航が無言で影を見つめて居ると影は、ニヤリと笑みを浮かべて口を開いた。

「さあ、黙ってないで。会話をしよう。コミュニケーションをしよう。話をしなければ、お互いに理解できないし、君の悩みも解決しない」

「いったい、何を話せと言うんだ？」

「何でも良いんだよ。世間話でも恋愛話でも君の身の上話でもいい。知性あるモノなら、コミュニケーションを行い、お互いの理解を深めて行くものだろう？ 知的要求、好奇心？ いや、違うね。やっぱり、他人を知り理解したいと思うのは、当然だと思うよ。理解で

きるかは、別にしてね」

「……」

航がむつすりとした表情で黙っていると影は、可笑しそうに笑った。

「君も強情だね。では、こうしよう。君が話題を提示できないと言
うのなら、僕がその話題を提供しよう。さて、何がいいかな」

「ここに来たのは、意味があったな？ 何故、俺は、ここに
居る。何故、ここに来れる？」

沈黙が続いていた航が突然、影に問いかけた。

「えー、その話は、めんどくさいから、やだよ。それよりもさ、も
っと君の身近な話がいいね。例えば、君の幼馴染の事とかね」

「どうして、それを？」

航は、驚いた様子で口を開く。

「何でも知っているよ。情報収集には、力を入れていてね。君の事
も、幼馴染の事も。君は、幼馴染の扱いに悩んでいる。君の意思、
彼女の意思、周りの意思、どれをとっても平行線ではない」

「うるさい！ 黙れ！」

航は、影の言葉が真実を突いていただけに激昂して、叫んだ。

「停滞は、何も生み出さないよ。良い方が悪い方が、どちらに進む

にしても動かない事には、進歩も成長も存在しない」

「悪い方へ転がる可能性が高い事だってあるだろ？ それでは、困るんだ。終わりなんだよ」

「君は、また逃げ出すのかい？ あの8年前の様に。名前を変え、顔を変えて逃げ出した先に得たモノは、あるのかい？」

影が薄気味悪い笑みを浮かべたかと思うと、航の意識は、プツリと途切れてしまった。

5話・8年の瀬み

朝。

時計の針が7時丁度を指して居た。

航がベットの上で、うつすらと瞼を開けると、台所の方から物音が聞こえてきた。

航にとっては、毎朝の事であるが、この儀式めいた物音によって意識が覚醒していく事を感じとっていた。

「航、起きたのね？ もう直ぐ朝食が出来るわ」

台所の方から、航には、聞きなれた声が聞こえてくる。

航のわずかな気配を感じとる能力に航自身、時々驚きを隠せない時がある。

神楽漣は、そう言う人間だった。

航は、半覚醒のまま起き上がり、ベットの端に腰掛けたまま大きな欠伸を試みせる。

「あら、大きな欠伸」

漣は、大きく開かれた航の口を指差して言った。

台所と、風呂場を除けば、ワンルームの作りである航の住んでいる

アパート。

これでも家賃月3万円と言う破格の安さだった。

四角い8畳ほどの広さの部屋の中には、炬燵。

角には、シングルベットがスペースを占領していた。

漣は、朝食を載せた長方形のトレイを炬燵の上に置くと、料理を並べ始めた。

ご飯に、卵焼きと、鮭の塩焼き。

いったって、シンプルな朝食だった。

航は、まだ寝ぼけ表情で炬燵の前に座った。

「航、うなされてたわ。また、8年前の夢を見たの？」

漣は、うなされていた様子を思う浮かべるように航に聞いた。だした。

「違うよ。確かに気分の良い夢じゃなかった。でも、もうあの時の夢は、見ない」

「そう、なら良かったわ」

漣は、航の返答を聞いて、少し安心した様子で炬燵を挟み、対面に座った。

「社会復帰プログラム・・・か」

航は、朝食を眺めながら、ポツリとそう呟いた。

社会復帰プログラム。

それは、大きな事件や犯罪に巻き込まれた者か、その主犯が刑期を終えて、社会復帰するにあたり、復帰困難だと判断された場合、適応される法律である。

適応された人間は、以前の名前と顔を失い、新たな人生を歩む事になる。

「8年前の事。後悔しているの？」

漣は、少し心配そうにそう聞いた。

「後悔なんて・・・していない。あの時、逃げださなければ、俺は壊れていたよ。そう考えれば、社会復帰プログラムを申請してよかったと思っっている」

「そう？ ならいいの」

「しかし、顔を変えて、名前も変えたと言っのにさ。どうして、漣には、ばれてしまったんだ？」

「それは、とても簡単な事だわ。私、あの時あの場所に居たのよ。航に出会って、航があの子の少年だと直ぐに分かったわ」

漣は、そう言って、とても嬉しそうに笑みを浮かべた。

航は、8年前に大きな事件に巻き込まれた。

いや、係わった。

そして、その事で心を痛めていた当時の航は、名前と顔を変えて、その現実から逃げ出したのである。

その一年後、典子達に出会い、幼馴染として付き合ってきた。

航が滯と再会したのは、今年の春。

桜の花びらが舞い落ちる入学式の日の事である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6776i/>

エレメンタル・コード

2010年10月17日05時19分発行